リカレント教育の拡充：障害福祉事業・サービスの研究

～障害福祉事業所における WHO-DAS2.0 を利用した適正サービスとは～

社会学研究科　経営専門職専攻

教授　木下（きのした） 隆志（たかし）、◎D3　松本（まつもと） 将八（しょうはち）

キーワード　1 利用者特性の把握、2 職員の資質向上、3 ガイドライン作成

研究概要

本研究はリカレント教育の一環として、障害福祉サービスについて研究会を実施した内容から、意欲的な研究を継続している松本氏の研究テーマについて発表を行う。

副題に示した通り、WHO-DAS2.0 は障害者のアセスメントツールであり、ICF の概念的枠組みを基礎としている。ICF の「活動と参加」を構成要素に関係づけられたもので、理解と意思の疎通・運動能力・自己管理・人付き合い・日常の活動・社会参加の 6 領域において測定する標準ツールである。このアセスメント指標である WHO-DAS2.0 のスコアを障害当事者に実施調査した結果、障害支援区分に有意な差が示されている項目も複数あった。これらの結果をもとに、上記対象施設では、アセスメント指標を基にした障害福祉サービスの内容・計画の立案、特に障害福祉分野で義務化されている個別支援計画への運用を進めてきた。いわば、障害者の正確な状態像の把握ができれば、それに応じた支援内容について検討できる流れを可視化したことになる。

障害者の特性に応じた障害福祉サービスの提供内容の可視化は、その提供が可能か否かという能力評価ができ、職員の業務能力の指標となり得ることがわかった。今回の報告では、WHO-DAS2.0 における調査結果および、その活用について、一連の報告をする。

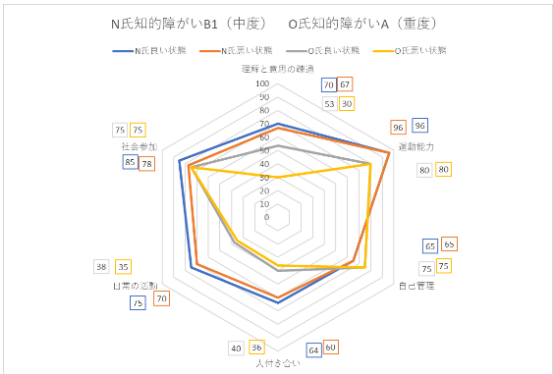

図 1　WHO-DAS を使用した状態像

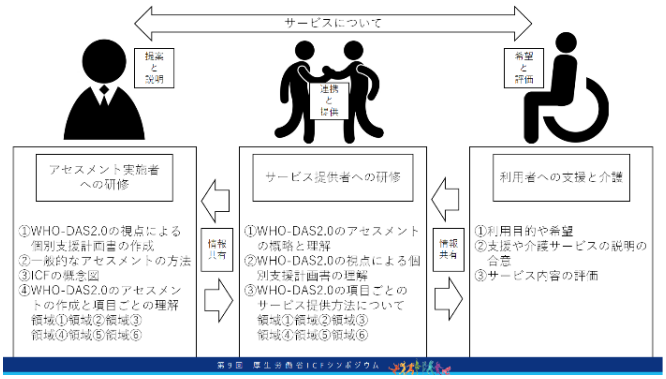

図 2　利用者支援のイメージ図

アピールポイント

本研究は NPO 法人において実施段階に入っており、ガイドラインやピクトグラムを使用したマニュアル作成まで進んでいる。介護保険におけるケアプラン自動化作成の動きが本格化する昨今において、障害福祉分野における有益なサービス提供ツールを目指したい。

★36 項目のアセスメント指標（生活介護では 12 項目）から障害特性を理解し、職員の個別支援計画を作成する流れの可視化が可能となった点を評価したい。